NON NOVEL

NON NOVEL

「ノン・ノベル」創刊にあたって

「ノン・ブック」が生まれてから二年一カ月、ここに姉妹シリーズ「ノン・ノベル」を世に問います。

「ノン・ブック」は既成の価値に〝否定(ノン)〟を発し、人間の明日をささえる新しい喜びを模索するノンフィクションのシリーズです。

「ノン・ノベル」もまた、小説(フィクション)を通して、新しい価値を探っていきたい。小説の〝おもしろさ〟とは、世の動きにつれてつねに変化し、新しく発見されていくものだと思います。

わが「ノン・ノベル」は、この新しい〝おもしろさ〟発見の営みに全力を傾けます。

ぜひ、あなたのご感想、ご批判をお寄せください。

昭和四十八年一月十五日

NON・NOVEL編集部

NON・NOVEL—65

長編超冒険小説(スーパー・アドベンチャー) 火神(アグニ)を盗め ¥ 630

昭和52年9月5日 初版第1刷発行

著者 山田正紀(やまだまさき)

発行者 黒崎勇

発行所 祥伝社(しょうでんしゃ)
〒101 東京都千代田区神田神保町 3-6-5
九段尚学ビル
☎ 03 (265) 2081

発売 小学館

印刷 萩原印刷 製本 関川製本

万一，落丁・乱丁がありました場合は，お取りかえします。 Printed in Japan
© Masaki Yamada, 1977

火神（アグニ）を盗め

山田正紀

スーパー・アドベンチャー
長編超冒険小説

祥伝社

目次

试读结束：需要全本请在线购买： www.er

プロローグ 7
第一章 反撃 17
第二章 作戦 67

第三章　潜　入　123
第四章　破　壊　173
エピローグ　235

カバー構成・坂野　豊＋小松原京子　イラスト・山下一徳
本文の絵・滝瀬源一

プロローグ

――「巨人の足」というのは、あくまでも外国人によって命名された地名に過ぎない。一九二六年にこの地を訪うた英国人探検家マックス卿が、地形の類似からほんの思いつきで命名したものなのだ。

原地の人たちには、やはり昔からのラーキンマという地名のほうがより軀になじむようである。

雑多な民族が集うヒマラヤ地帯では、多くの言葉が語源を曖昧としているが、このランキーマなる地名もまたその例外ではない――ただチベット自治区のランガル湖に源を発し、国境を越え、インド領内のこの地を過る河が同じくランキーマ河と呼ばれていることから、漢語を語源とする説が一般的なようだ。

原地の人たちの感情を別にすれば、「巨人の足」なる名は言いえて妙といわねばならない。チャウカンバ山、バドリナット山、ナンダデビ山……七〇〇〇メートル級の山峰を背景としながら、わずか五〇〇メートルから一〇〇〇メートルの山塊を外壁とする盆地など、まさしく足の名にしか価しないように思えるからである。

ヒマラヤ地帯にこんな盆地が生じた原因については、地質学者たちのさまざまな努力にも関わらず、いまだはっきりとは解明されていない。

――インド独立以前には、ランキーマは巨大な岩塩層を擁する地として有名だった。数人の藩主がスポンサーとなり、膨大な量の岩塩を産みだしていたのである。その産出量は、優にデリー一都の需要を充たすに足るほどだったという。

ただでさえ食糧に乏しい山岳地帯で、この岩塩がどれほど重要なものであったかは、想像に難くない。事実、グルン族、マガール族などの岩塩層をめぐる紛争は、歴史に多く残されているのだ。

ここに一つ、興味ある伝承が語り継がれている。

古代、ランキーマの地で、火神アグニが羅刹と争ったという伝承である。アグニはインド＝ヨーロッパ人に尊崇された神で、火を象徴する存在だ。――ヴェーダ聖典によると、その貌には溶けたバターが輝り、髪は淡黄褐

色、ときに鷲、あるいは牡牛の姿に変化したという。
アグニと羅刹の戦いは、一年有余の長きに及んだとされている。そして、アグニの発する炎によって、羅刹は猛烈に発汗し、ついに溶け崩れてしまう……ランキーマの岩塩層こそ、その羅刹の死骸だというのだ。
神話学者によると、この伝承はヒンズー教徒が岩塩層をかちえた歴史を暗喩しているものらしい。伝承の成立時期は意外に新しく、ほぼ三〇〇年前とされている。むしろ、神話と形容されるべきかもしれない。
アグニと羅刹との戦いの長さを考えれば、岩塩層をめぐる争いがどれほど激越なものであったか、容易に想像できる。グルン族、マガール族は、兵士として非常に優秀なことで知られている。ヒンズー教徒としても、岩塩層をかちとるためにはそうとうの犠牲を払わねばならなかったろう。
が、——時代は変わった。今や、ランキーマの岩塩層は、誰にとってもさほどに価値のあるものではなくなっている。岩塩層の荒廃とともに、ランキーマもひっそりと朽ちていくように見えたのだが……。
この年、再びランキーマが脚光を浴びるときが来たのである。この地に、原子力発電所が建造されることとなったのだ。中国・チベット自治領との国境から、山を挟んで数十キロを隔てているだけのランキーマに、なぜインド政府は原子力発電所を建造することを決定したのか……世界のいたるところで、さまざまな憶測が組み立てられた。ニューデリー送電のため、というインド政府の公式発表を鵜呑みにする者は一人としていなかったのである。多くの国家が、なかんずく中国が、インド政府は国境紛争に備えて、大規模な軍事基地を建設するのではないかという疑惑を抱いたのは当然だったろう。
原子力発電所は、伝承にちなんで、アグニという名称を与えられた……。
——バンヤン、シダなどの亜熱帯林が、視界を一面に覆っている。それら亜熱帯林は、遠くに輝く山峰と奇妙なコントラストを成していた。
水の流れる音が聞こえてくる。亜熱帯林が楔を打ち込まれたように落ち込み、小さな渓谷を形作っているのだ。岸辺には、無骨な岩塊がむきだしになっていた。
その岸辺に、一人の男が蹲っていた。一見して、登山

者と知れる服装の男だ。蒙古型人種には違いないが、ヒマラヤの住民とは微妙に貌が異なっている。

男はせせらぎにハンカチをひたし、繰り返し首筋をぬぐっている。眼を閉じたその表情が、いとも暢気そうに弛緩していた。

だが、――誰か武術の心得のある者が、その男を目撃したら、全身にいささかの隙もないことに驚くかもしれない。

男は、まさに敵地にいるのだった。

男の名は賈――中国諜報機関の情報部員だった。賈は、ここ五年間を主に対インド工作に費やしてきた。中国とインドとの間に国境紛争が起きるとき、そこに必ずアメリカ、あるいはソ連の干渉があった。CIA、KGBこそ、賈のよき好敵手だったのである。そして、――賈は、気むずかしい上層部をも常に満足させるほどの成果を修めてきたのだった。

誰であれ、CIA、KGBの工作員を相手に回して、互角にわたりあうのは容易な業ではない。まして常に勝利を収めるなど、それこそ超人的な頭脳と体力を要求される。その一事をもってしても、いかに賈が優秀な情報部員であるか知れようというものだ。

事実、CIAは賈にジャガーのコード・ネームを与えて、徹底してマークしているほどなのだ。

現在、賈はある男が通りかかるのを待っている。賈をもってしても、神経に鑢をかけられているような時間だ。何かを待っているときほど、情報部員が消耗を強いられる時間はないのである。

この場合も、いつ国境警備のインド兵に見咎められないとも限らなかった。一応は日本国籍のパスポートを持ち、登山者を装ってはいるが、それがどれほどの役に立つか疑問といわねばならなかった――その暢気そうな表情とは裏腹に、賈は歯を咬み鳴らしたいほどのストレスと戦っていたのである。

渓谷には、穏やかな午後の光が充ち充ちていた。

不意に、賈の表情が動いた。その鋭い聴覚が、草を踏む微細な足音を捉えたのだ。賈のハンカチを持つ手は、なおも休むことなく首筋を往復している。

亜熱帯林の茂みから、一人の男がゆっくりと姿を現わした。五〇がらみの、小柄なインド人だ。黒い肌に、まばらに伸びている白い髭がいかにも貧相に見える。男は

试读结束：需要全本请在线购买： www.er

一頭の山羊を連れていたが、その山羊も男に負けず劣らず貧相だった。
男は渓谷の賈を一瞥したきり、それ以上に何の興味も示そうとはしなかった。男と山羊は共に肩で調子をとりながら、ヒョコヒョコと崖の上を歩いていく。
「待ってくれ」
賈は、正確なヒンディー語で呼びかけた。
「……」
男は足を停めた。賈の正確なヒンディー語に驚いたらしく、口をだらしなく弛緩させている。山羊だけが、変わらぬ足どりで林のなかに消えていった。
「ビスミルさんだね」と、賈は言葉をつづけた。
「原子力発電所アグニで炊事係をしているビスミルさんだろう?」
「そうだけど……」男は、ノンビリとした声音で応じた。
「なんか用かね」
「実は、ちょっとあんたに訊きたいことがあるんだが……」
そう言うと、賈は崖面に向かって大きく跳躍した。ほんの数瞬のうちに、賈の躯はもう崖の上に上がっている。驚くべき足腰の強さ、身の軽さだった。
「ほう……」ビスミルと呼ばれた男は、子どものように喜んでいる。
「おまえさん、たいしたもんだね」
「あんたに訊きたいことがあるんだ」賈は息も弾ませずに、そう繰り返した。
「あんた、アメリカ人から何か頼まれたことがあるだろう?」
「なんのことかね」急に、ビスミルは狡辛いような眼つきになった。
「とぼけるのはやめろよ」賈の声音が低いものになった。
「大体のことは、調べがついているんだ。俺はただあんたの口から、確証をとりたいだけなんだよ」
「なんのことかね」と、ビスミルは繰り返した。
「わかったよ」賈はため息をつき、腕から時計を外した。
「俺の訊くことに答えてくれたら、この時計をやるからさ」

ビスミルは腕時計を取り、しばらく耳に当てていた。そして、ニヤリと笑いを泛かべた。
「なんでも訊いてくだせえ」
「一月ほどまえに、あるアメリカ人があんたに接近してきた」賈は苦笑しながら言った。
「そして、あんたに何か頼みごとをしたはずだ。その頼みごとが何だったのかを教えてもらいたいんだ……」
「ええと……」ビスミルは頬を掻いた。
「あれは……その……原子力発電所アグニの……」

——夜空に、原子力発電所アグニの丸い屋根がそびえている。運転開始を二週間後にひかえて、アグニは持てる力をきりきりと引き絞っているように見えた。監視塔の照明が、昼間と見まごうほどの明るさだ。
そのサーチライトの間隙をぬって、今、ひとつの影が走っていく。その影は、幽霊に酷似していた。物音をまったく立てず、それでいて確実に前進しているのだ。
その影は、——賈だった。
賈はこうして潜入しながらも、アグニの徹底した警備体制に舌を巻いている。アグニの運転が開始されていないのが幸いしたのだ。運転が開始され、総ての警備体制が整ったときには、何人といえどもアグニに潜入するのは不可能になるだろう。
賈は、プロの情報員だ。いかにそれが堅固でも、軍隊による定期的な巡回や、機銃を装備した監視塔ごときに驚くものではない。賈に舌を巻かせたのは、アグニの周囲に張りめぐらされている警備体制だった。
最初のそれは、アグニの施設を取り巻いている赤土のベルトだった。一〇〇メートルほどの幅で、草の一本すら刈りとられたむきだしの土が、ベルト状に施設を囲んでいるのである。俗に、触圧反応装置という名称で知られている警備方法だ。人間がこの地帯に足を踏み入れると、その体重が建物の警報を鳴らせるのだ。
さらには、触圧反応地帯の内側に、有刺鉄線の二重柵が設けられている。いずれは、その上縁の電線には高圧電流が流されることになるのだろう。柵と柵との間に、猛犬が放たれることになるのもまず間違いない。
触圧反応装置、二重柵の高圧電流……そのどちらが働いていても、賈がアグニの施設に忍び込むのは不可能だったろう。アグニがいまだ運転を開始していないこと

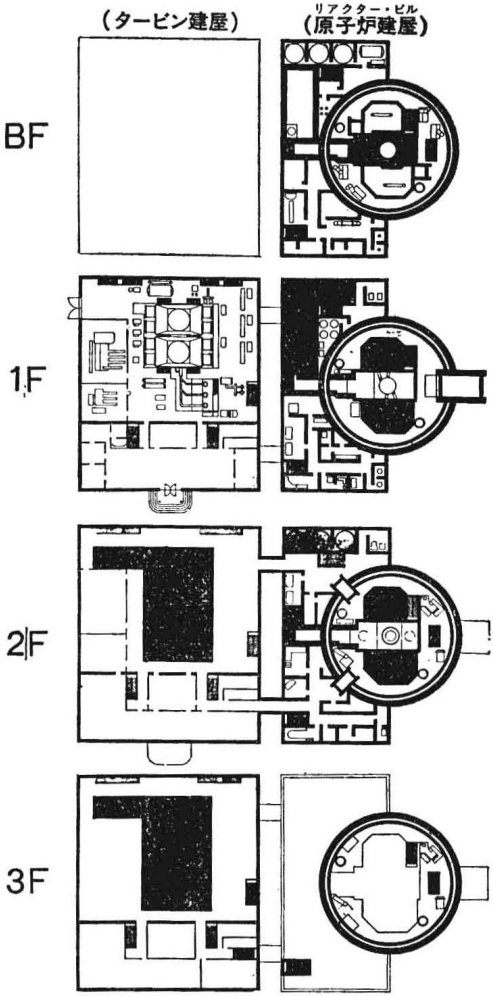
を、神に感謝すべきだった。
賈は闇を這いながら、苦笑を泛かべた。神に感謝することは、筋金入りの共産党員たる中国の情報部員にはあまりに似つかわしくない行為だったからだ。
ひたひたという水音が聴こえてくる。前方に、川面のきらめきが見えた。ランキーマ川である。アグニは冷却水をランキーマ川から取り、また放出している。ランキーマ川の幅は三〇メートルほど、一五メートル幅の支流が設けられ、アグニにたどり着くには橋を渡ることを要求される。
賈が、橋を渡るわけにはいかなかった。それぞれの橋には、監視施設が設けられ、渡橋する者を厳重にチェックしているからだ。
賈は、しばらく川岸の草叢に身を潜めていた。サーチライトの強烈な光箭が、繰り返し闇を薙いだ——河を走る武装監視ボートを見たときには、さすがの賈も胃が痛くなる思いがした。いかに国境に近い原子力発電所とはいえ、警備があまりに厳重に過ぎるのではないだろうか。
川面までは三メートルほどの高さがあった。両岸が、垂直に切り立ったコンクリート壁で補強されているのである。賈はそのコンクリート壁にぶら下がり、手を放した。腹がコンクリート壁をずり、その軀が黒い水に呑まれていった。
ほとんど音を立てない泳法だ。賈の痩せた軀が、水のなかで魚のようにうねった。
二〇メートルほどを泳ぎ、賈は小さな声を上げた。
ワニが視界を過ったのだ。よほど餌を充分に与えられているのか、賈を見向きもしないで、悠々と泳ぎ去っていく。
——気違い沙汰だ、と賈は思わないではいられなかった。この原子力発電所では、熱排水でワニを飼っているのだ。おそらくは、ワニも警備体制の一環として数えられているに違いない。アグニが運転を開始したあかつきには、ワニの餌は大幅に削られることになるのだろう。
賈は、なんとも薄ら寒い思いで河を泳ぎきった。鉤のついたロープを使い、コンクリート壁をよじ登る。
賈の運は、そこで尽きた。
地にようやく身を持ち上げたとたんに、凄じい光の奔流を浴びせられたのである。さしもの賈も、とっさには

抗する手段も知らなかった。

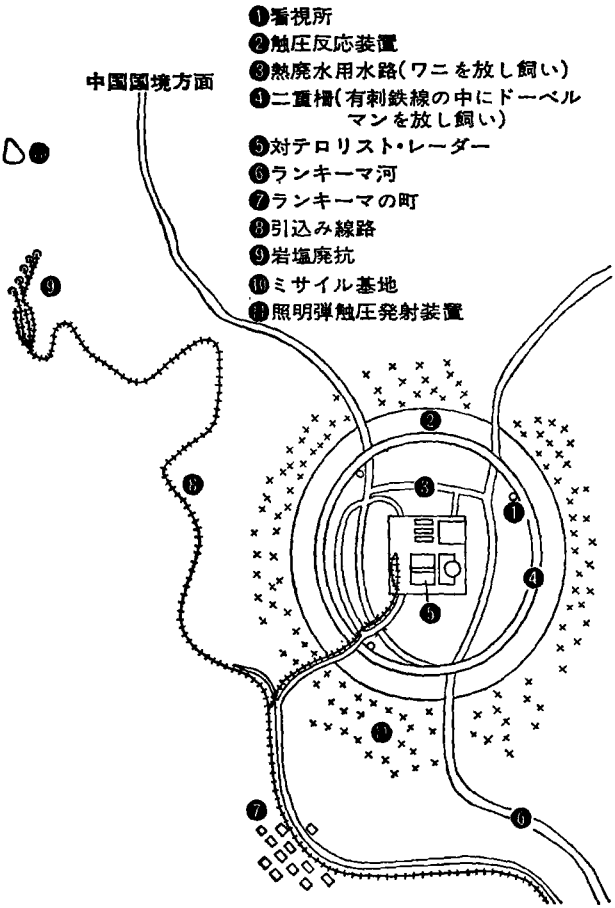
賈の視線は、タービン施設の屋上に建てられている塔に釘付けにされていた。賈は、塔の上で回転しているレーダーは、国境の空を見張るためのものだとばかり思い込んでいたのだ。そのレーダーが、原子力発電所の敷地をもカヴァーしているなどとは、想像だにしていなかったのである。

賈に、自分のうかつさを悔んでいる暇はなかった。数瞬の後には、機銃の連射が、賈の頭蓋を砕き、その身肉を咬みちぎっていたからである。

"アグニ"の内部概略図



原子発電所"アグニ"
その周辺の概略図



试读结束：需要全本请在线购买： www.er